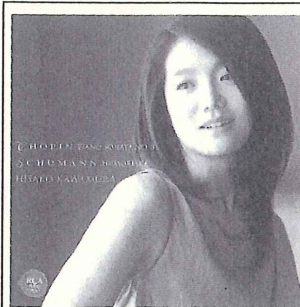


注目のRCA第2弾登場！ 河村尚子のシューマン&ショパン

河村尚子がショパン・ピアノ・ソナタ第3番、
シューマン・フモレスケ、他を録音



シューマン：フモレスケ 変調Op.20, ショパン：ピアノ・ソ
ナタ第3番 短調Op.58, シュー
マン～リスト：献呈(愛の歌)
S566
河村尚子 (p)
(録音：2011年5月)
[RCA©SICC10112] CD & SACD

Motokiwa Yano 谷戸基岩

「器」の大きさを 伝え来る「フモレスケ」

およそ「世評」というものには懐疑的な私でさえも、河村尚子の演奏活動に寄せられる賞賛の数々にはただ頷くしかない。私の聴いたりサイトル、室内楽、協奏曲のいずれでも、ここ1、2年の彼女の演奏は高い水準を維持しており、大きく外れたことがない。特に室内楽においてアンサンブルをしつかりと活性化する能力、残響過多なホールにおいても客席での音の明晰さをそれなりに保てるセ

ンスのよさには驚かされた。また録音に関しても安易な態度ではなく、慎重にレパートリーを選んだ取り組みに好感が持てる。RCAからのデビュー盤となった2008年録音のショパン・アルバムにしても有名曲ばかりに偏らず、こだわり抜いた選曲・演奏だった。さて今回の新録音のうちシューマン《フモレスケ》に関しては「ルール・ピアノ・フェスティヴァル」における2008年のライブ盤が発売されていた。けれどもしっかりと弾き込んでいる曲なのでちゃんとスタジオでという河村の

希望により新録音することになった、とのこと。私は2008年のライブ盤の直線的で推進力のあるノリの良い演奏でも十分に素晴らしいと思えるのだが……今回の録音を聴くとアクセントの付け方ひとつひとつに細心の注意が払われており、作品が発散せず、まとまりのよさを感じさせる。これら2つの録音からは河村の表現者としての容量の大きさが測られる。彼女にとって、実現可能な理想的表現が一つだけではないからこそ納得行くまで録音セッションをしたくなる気持ちはよくわかる。

ショパンの絶妙な間合いと 特別な思い伝わる《献呈》

昔からカペル盤とリパッティ盤を愛聴している私にとって、若手ピアニストが弾いたショパン《ソナタ第3番》を聴くのにいささかの躊躇いを感じずにはいられない。特に黄昏の国への入口のようなどこか不吉な美を秘めた第3楽章は無神経に弾かれれば不快だし、美しさが際立てば不安に駆られてしまう。この楽章も含め河村の演奏からは間合いの絶妙さが随所に感じられる。しかしそれらは抜き差しならぬほど深刻なもので

はない。そして思い入れたっぷりの第4楽章からは若々しさも十分に感じられほっとさせられる。

本CDは締めくくりにシューマン・リストの《献呈》が収められ、今年4月に急逝した河村の師ウラディミール・クライネフの思い出に捧げられている。城所孝吉による河村へのインタビューによるとショパンの《ソナタ第3番》は彼女が1999年ダルムシュタットでのヨーロッパ・ショパン・コンクールに参加した時に初めて取り上げたもので、師クライネフから指導を受けた思い出の曲でもある、とのこと。この秋に予定されている河村のコンサート・ツアーではバッハ・ブゾーニ編曲の《シャコンヌ》、ベートーヴェンのソナタ《月光》、ショパンの《前奏曲》作品45とともに本CDにも収録のショパン《ソナタ第3番》が並んでいる。オルフェオの物語との関連が指摘される《シャコンヌ》に加え、弔いの鐘の音が響くとする人もいる嬰ハ短調の2曲と一緒に並べたプログラミングには師への追悼の気持ちだけではない、河村の特別な想いが込められているようであり、これらのリサイトルも聴き逃さない。